社会的サポート・ネットワークの測定法とその課題

石　田　光　規

Ⅰ　ネットワークとソーシャル・サポート

人々は誰かと関係を結び，そこから多くの恩恵を得ている。人々が何らかの関わりを持つ人間関係を特定し，その影響や関係の様相を分析・検討する研究領域がパーソナル・ネットワーク研究である[1)]。これらの研究は，とりわけ，行為者とプラスの関わりを持つ人間関係に焦点をあてたアプローチが多い。本論では，諸個人とプラスの関わりを持つ人間関係に着目した研究を「社会的サポート・ネットワーク研究」とまとめよう。

さて，ひとくちに社会的サポート・ネットワーク研究といっても，その領域は非常に広く，測定方法もさまざまである。そこで本稿では，まず，社会的サポート・ネットワーク研究の歴史を振り返り，研究の射程を明らかにしよう。次いで，社会的サポート・ネットワークの測定方法についてまとめ，社会的サポート・ネットワーク研究の問題点，可能性について検討していく。

Ⅱ　歴史的経緯

1　出発点[2)]

社会的サポート・ネットワーク研究は，行為者の人間関係を家族や地域，職場など特定の領域に限定してとらえるのではなく，境界を超えて拡がるネットワークとしてとらえる。そこに焦点があてられたきっかけは，人々の親密圏の変容にある。

近代社会の進展とともに，血縁，地縁といった第一次集団で完結していた人間関係は，空間を越えて広がりを持ち始めた。それに付随して，家族や地域といった境界の外に広がりをもつ人間関係の様相とその影響を分析するアプローチの必要性が生まれた。

そこに最初に目を付けたのがイギリスの家族社会学者のE. Bottである〔Bott（1955=2006, 1957）〕。彼女は人々が取り結ぶ関係を「関係の連鎖によるネットワーク」ととらえ，人々の関係は「家族」といった小集団の中で完結するわけでなく，その外までも広がり，そうした人々は家族成員に多くの影響を与えていることを指摘した。彼女は世帯外まで拡がるネットワークが夫婦の家族役割に与える影響を検討するために，ネットワーク・アプローチを用いた。その後，家族社会学では，ボットの仮説を検証するべく，数多くの社会的サポート・ネットワーク調査が行われている[3)]。

家族社会学よりも少し後に社会的サポート・ネットワーク・アプローチを取り入れたのが都市社会学である[4)]。都市社会学では，人々が親密な関係を結ぶ領域が家族・地域を越えて拡散していく様相を把握するために，社会的サポート・ネットワーク調査を導入した。この手法は当初は，アフリカの都市社会の調査のために導入され，その後，北米における友人関係の拡散および変容を分析・検討するために用いられた[5)]。

2　研究の広がり

社会的サポート・ネットワーク研究はその後，幅広い領域で展開されるようになった。この一連の研究は，諸個人が取り結ぶサポート・ネットワークを独立変数ととらえるアプローチと従属変数と

とらえるアプローチに大別される。

前者の代表は，身の回りの人々が諸個人に与えるプラスの影響に着目したソーシャル・サポート研究である。このプラスの影響は，諸個人のストレスの軽減, 高い地位の達成などさまざまである。また，プラスの効果以外にも，ネットワークが投票などの政治的態度に与える影響，外国人認知に与える影響を分析した研究もある[6)]。後者の研究の代表は，先に挙げた都市社会学的研究である。

また，近年，さまざまな分野で目にする社会関係資本（Social Capital）研究のなかでも，個人の保有する社会関係資本に焦点をあてた研究は，広義には社会的サポート・ネットワーク研究といって差し支えない。

このように，社会的サポート・ネットワーク研究の領域は非常に広範かつ多様である。そのため，研究を進めるに当たっては，目的に合致した方法を選択し，社会的サポート・ネットワークを測定する必要がある。そこで以下では，社会的サポート・ネットワークの測定法を概説し，その問題点および注意点を見ていこう。

Ⅲ　測定の方法

社会的サポート・ネットワーク研究は，諸個人にとってプラスの影響をもたらす人間関係を把握するところから始まる。その方法としてあげられるのが，ネームジェネレータ（name generator）方式，ポジションジェネレータ（position generator）方式, リソースジェネレータ（resource generator）方式の3つである。まず，それぞれについて概説しよう。

1　ネームジェネレータ方式

ネームジェネレータ方式は，ネームインタープリター項目と対になって，行為者の社会的サポート・ネットワークを特定する。この方式は, まず,「あなたにとって重要なことを相談する人を思い浮かべてください」といった質問文を掲げて，回答者にサポートメンバーを想起してもらう。次に，当該のサポートを提供してくれる人のうち上位5名などと人数を絞り，それぞれの人を具体的に思い浮かべてもらう。

そのさいの質問文は,「仕事の情報を交換する相手」や「一緒に余暇を過ごす相手」などさまざまである。また，具体的に思い浮かべてもらう人数についてもとくに決まりはなく，分析目的に応じて人数を設定する。ただし，あまり人数を多くしすぎると，回答者の負担が過大になるので，多くの調査では特定人数を5人程度にとどめている。以上のような手続きでサポートメンバーを想定する方法をネームジェネレータという。

その後，想起された数名の人々についての属性や回答者との間柄，挙げられたメンバー同士の関係，回答者との親密さ，知り合ってからの年月などを詳しく尋ねる。これがネームインタープリター項目である。

この手法を用いた代表的調査としてあげられるのが，1985年にアメリカで実施されたGSS調査（General Social Survey）である。この調査データは，一般公開されているため，その後，さまざまな研究で使われ，また，調査技法についても多くの議論を呼んだ[7)]。日本でもアメリカのGSS調査を模してネームジェネレータ方式の大規模な調査が行われている。それが2003年の日本版GSS調査（JGSS-2003）である。この調査では，GSS調査で特定された「重要なことを話したり，悩みを相談する人たち」だけでなく,「選挙・政治について話をする人たち」「仕事について相談したり，アドバイスをもらう人たち」も特定している（大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編 2005）。この調査データは東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センター SSJデータアーカイブから公開されているため，研究目的であれば使用可能である。

ネームジェネレータ方式は，ネットワークの測定方法としては最も手間がかかる一方で，行為者のネットワークを非常に詳しく特定できる。そのため, さまざまなネットワーク指標を作成し, ネットワークの効果やネットワークの様相を詳細かつ厳密に検討することが可能である。しかしその一方で，ネットワークの特定範囲を親しい人の上位

○人といった形で区切るため，その範囲を外れるサポート関係を見落とすという欠点がある。

実際，ネットワークメンバーを何人に絞るかにより，その後の分析において算出されるネットワーク指標は異なる。たとえば，相談のネットワークを特定するにしても，上位3人までで区切る場合と6人までで区切る場合とで，ネットワーク情報は変化する可能性が高い。これらは，その後の分析にも深刻な影響を与えるので，調査票の作成に当たっては慎重に吟味する必要がある[8)]。

とはいえ，多少の留意点はあるものの，ネームジェネレータ方式は，社会的サポート・ネットワークを特定するにあたり，もっとも多くの情報をもたらしてくれる。そのため，分析のしがいのある測定手法だと言えよう。

2　ポジションジェネレータ方式

ポジションジェネレータ方式は，N. Linが提唱したネットワークの測定方法である〔Lin（2001a=2008, 2001 b）; Lin et al.（2001）〕。この方式では，まず，回答者に複数の職業的地位を提示する。次に，これらの地位に就いている人々と直接的あるいは間接的に関係があるか否か尋ねる。そのさい，関係の有無を男女別や間柄別に尋ねることもある。このようにして特定されるのがポジションジェネレータ方式による社会的サポート・ネットワークである。以下，簡単な質問文例をあげておこう。

問○　あなたには次のようなお知り合いがいますか。あてはまるもの<u>すべて</u>に○をつけてください。

1　都道府県庁の部課長以上の役職者
2　役所・役場（市区町村）の部課長以上の役職者
3　同業組合や労働組合の役員
4　町内会・自治会の役員
5　ボランティア団体・市民運動団体の役員
6　国会議員
7　地方議会議員
8　市区町村の首長（市長，村長）
9　政治家の後援会の世話役
10　新聞・テレビ等のディレクター

この方式の第一の利点は，ネームジェネレータ方式よりも簡単なことである。また，ネームジェネレータ方式のように，サポートメンバーの上限人数を区切らないため幅広くサポートメンバーまたは交流の範囲を特定できる。しかしながら，回答者が享受しているサポートの内容が定かではないため，サポート・ネットワークとその効果の因果関係を説明する際に若干説明力が弱い。さらに，とりあげる職業項目にも恣意が入りやすい。実際に標準職業分類を参考にすれば，職業は数千存在する。したがって，その中から15個程度の職業を選択する方式は，かなり偏ったものだと言える。

JGSS-2003では，ネームジェネレータ方式に加え，ポジションジェネレータ方式でも社会的サポート・ネットワークを特定している。JGSS-2003以外の大規模調査では，1995年の社会移動と社会階層全国調査（SSM1995）において，ポジションジェネレータ方式による質問がなされている（1995年SSM調査研究会 1996）。これらはいずれも公開されているので，データを入手して分析することも可能である。

3　リソースジェネレータ方式

リソースジェネレータ方式は，ネームジェネレータ方式とポジションジェネレータ方式の利点を包摂したと言われている〔Kawachi et al. eds.（2008=2008）〕。つまり，ネームジェネレータほど複雑ではないが（ポジションジェネレータのように簡便であり），ポジションジェネレータのようにサポート項目が曖昧ではない（ネームジェネレータのようにサポート項目が明確な）測定方法である。具体的な方法は以下の通りである。

まず，リソースジェネレータ方式は，ネームジェネレータ方式のように，社会的サポート・ネットワークのメンバーが提供してくれるであろうサポート資源を定める。たとえば，「重要なことを相談する人」「一緒に気晴らしをする人」がそれにあたる。次に，当該のサポートを得られる人の

有無，あるいはその人数を尋ねる。そのさい，当該サポートを提供してくれる人を，回答者との間柄別に訪ねたり，回答者との空間的距離別に尋ねたりすることもある。たとえば以下の形式である。

問○　あなたが，つぎのようなおつきあいをする親族は何人くらいでしょうか。その方のお住まいまでふだん使っている交通手段でかかる時間別に，数字でお答えください。

(A)　病気のときの身のまわりの世話を頼む

同居・敷地内

□ 人

30分未満　□ 人　30分～1時間未満　□ 人

1時間～2時間未満　□ 人　2時間以上　□ 人

(B)　買いものなど日常の用事を頼む

同居・敷地内

□ 人

30分未満　□ 人　30分～1時間未満　□ 人

1時間～2時間未満　□ 人　2時間以上　□ 人

特定のサポート項目を提示し，回答者にその有無を尋ねる方式は，使い勝手の良さも手伝い，ソーシャル・サポート研究において広く用いられている。また，回答者のサポート人数を，上述のように空間的距離別に特定する方法は都市社会学研究においてしばしば見られる。さらに，第2節で述べた地位達成におけるサポート・ネットワーク研究のうち，就職や転職手段に焦点を絞った研究も，リソースジェネレータ方式を用いることが多い。

リソースジェネレータ方式は，諸個人が形成するサポート・ネットワークの構造的把握という点では，ネームジェネレータ方式に劣る。しかし，人数を限定しないため，サポート・ネットワークメンバーをもれなく特定することができる。また，ネームジェネレータ方式ほど手間はかからない。そのため，多くの調査で用いられている。

Ⅳ　測定のさいの注意点および諸問題

社会的サポート・ネットワークの測定のさいには，いくつかの注意点および問題点がある。これらは，質問項目の作成およびデータ分析にあたり重要である。以下では，ネットワークの測定方法の選択，測定するネットワークの内容，調査の複雑性，ネットワーク認知，マイナス関係の順に論じていこう。

1　ネットワークの測定方法の選択

社会的サポート・ネットワーク質問を作成するさいにまず注意したいのが，どの測定方法を用いてネットワークを特定するかである。前節にもあげたように，ネームジェネレータ方式，ポジションジェネレータ方式，リソースジェネレータ方式の3つには，それぞれ長所と短所がある。しがたって，分析の目的に沿う形でそれぞれの方法を選択しなければならない。具体的なポイントは以下の通りである。

ネームジェネレータ方式は，社会的サポート・ネットワークを特定する方法の中では最も手間がかかり複雑なものである。その代わりに，行為者のサポート・ネットワークについて最も詳細なデータを得ることができる。そのため，ネットワー

ク指標についても，サイズ，密度，多様性，媒介性などネットワーク分析の手法を用いたさまざまな変数を作成することができる。行為者のサポート関係を構造的に把握し，詳細な分析を行いたい場合には，ネームジェネレータ方式を用いるべきだろう。

ポジションジェネレータ方式とリソースジェネレータ方式は，ネームジェネレータ方式ほど手間がかからない。また，ネームジェネレータ方式のように特定しうるネットワークの人数を限定しないため，行為者のサポート関係を幅広くとらえることができる。行為者のサポート・ネットワークの構造的特性にはあまり拘らず，彼ら/彼女らの人間関係を幅広くとらえたい場合には，ポジションジェネレータ方式またはリソースジェネレータ方式が有効である。

ただし，ポジションジェネレータ方式は，行為者が特定の地位についている人から，いかなるサポートを得ているのか判断し得ないケースも多い。第Ⅲ節第2項であげた例のように「知り合いか否か」尋ねただけでは，ネットワークメンバーからどのようなサポートを得ているのかわからない。したがって，ストレス研究や就職研究などのように，サポートの帰結が明確な事項を従属変数としている研究ではあまり適切ではない[9]。

リソースジェネレータ方式は手軽さを保ちつつ，サポート・ネットワークの種類も特定することができる。しかし，構造的な指標の作成という点ではネームジェネレータ方式よりも劣る。また，後述するように，リソースジェネレータ方式でも質問事項を増やせば，かなり複雑になることも否めない。

ネットワークの測定方法の選択は，質問項目作成の入口として極めて重要である。したがって，それぞれの特性を踏まえつつ，慎重に検討していきたい。

2　測定するネットワークの内容

社会的サポート・ネットワーク質問を作成するさいの第二の注意点は，測定すべきネットワークの内容である。これについては，大まかに，特定するネットワークの種類と詳細な項目との二つに分かれる。

(1) 特定するネットワークの種類

ネットワーク質問はいずれの方法を用いても，「相談相手」,「気晴らしの相手」,「付き合いのある相手」のように「○○をしてくれる人（相手）」という形式で関係を結ぶ条件を提示して，当該ネットワークを特定していく。そこで重要なのが特定される社会的サポート・ネットワークの種類およびその妥当性である。

社会的サポート・ネットワークは，諸個人の心身の安寧のみならず，就職，昇進などさまざまな場面で効果を発揮し，それに付随して非常に多くの領域で研究がなされている。また，社会的サポート・ネットワーク研究は，単純にそのサポート効果を検討するだけでなく，投票行動などの態度決定に与える影響，親密圏の変容に射程をおいた研究など実にさまざまである。

そのさい重要なのが，分析目的に合致したネットワークを特定することだ。たとえば，就職の研究をするにあたり，親しい人を特定しただけでは，分析に不備が生じる。この場合には，就職情報の取得先も尋ねておかなければならない。

社会的サポート・ネットワーク質問は，前項であげたネットワークの測定方法だけでなく，特定されるサポート・ネットワークの種類によっても，抽出されるネットワークのメンバーが異なってくる。たとえば，重要なことを相談する相手と気晴らしをする相手では，人々は異なったサポートメンバーを想定する可能性が高い[10]。また，「重要なことの相談相手」についても過去1年間に期間を限定するか，期間を限定しないかによってあがってくる人物は異なる。したがって，どのような質問文でネットワークを特定するかは，非常に重要なのである。

そのようなことを念頭に置き，これまでのさまざまな調査において，どのようにネットワークが特定されてきたのか，社会的サポート・ネットワークの測定方法とともに表1にまとめておこう。なお，この表は，国内の調査を中心にまとめている。

表1　ネットワーク調査のまとめ

調　査	調査方式	道具的			情緒的	
		緊急（大）	日常（小）	助言・情報	相談・共感	付き合い
デトロイト調査，ハンガリー調査（Litwak and Szelenyi 1969）	RG	腹の調子が悪く寝込んだ（1日） 虫垂炎（2週間） 骨折（3ヶ月） 1週間寝込んだときの子供の世話・家事・買い物	1時間の子供の世話 何かちょっとしたものを借りる			
イーストヨーク調査（Wellman 1979）	NG					家庭の成員以外で最も親しい人6人
北カリフォルニア（Fischer 1982）	NG	大金を貸してくれるか，借りることができそうな人	町の外に出かけるときに家の世話をしてくれる人 過去三ヶ月間に家事を手伝ってくれた人	重要な決定をするさいに役に立つ助言をしてくれた人	個人的な心配事について話し合った人 仕事上の決定について相談した人	最近，社交的活動でかかわりのあった人 余暇時間の共通の関心事について話し合った人 婚約者あるいはデートをするのに「最良の友人」
第二次イーストヨーク調査（Wellman and Wortley 1990）	NG	大サービス（子供の世話，長期介護など）（large services） 資金援助（finantcial aid）	小サービス（家庭用品援助など）（small services）		情緒的サポート（emotional aid）	社交(companionship)
GSS1985	NG				過去1年重要なことを相談した人5人	
天津調査（Ruan 1998）	NG	病気の時に家事を手伝ってくれる人 お金を借りることが出きる人	家具移動やキッチン改修など家の周りのことを手伝ってくれる人 砂糖や塩などちょっとしたものを借りることができる人	入学，就職，転職などのさいにコネとなる人 転職，結婚など人生の重大な局面でアドバイスをもらえる人	半年の間に重要なことを相談した人 配偶者との問題について話すことができる人 落ち込んだときにその問題について話すことができる人	買い物，映画などの社交をともにする人 食事やゲームなどで月に一度はコンタクトをもつ人
1982年小田原市（藤崎 1998）	NG，RG	経済的援助（間柄別） 病気の時の手助け（間柄別） 孫のおもり（間柄別）	贈り物（間柄別） 家事・家の修理（間柄別）		何でも打ち明けられる特定の人	
1987～89年松山・四国・中四国調査（大谷 1995）	RG					最も親しい人(間柄別) おしゃべりをする人（間柄別） 一緒に遊びに行く人（間柄別） 家を訪問する人（間柄別） 日頃親しくする人1人（間柄，距離別）
1989年大阪府保育所（関井ほか 1991）	RG	病気の子どもの世話(間柄別，頼る度合い)	まとまった買い物に出かける間の子どもの世話（間柄別，頼る度合い） 仕事で帰宅が遅くなるときの子どもの世話（間柄別，頼る度合い）	子育てのやり方について助言を与えてくれる（間柄別，頼る度合い）	子どもの体調が悪いとき相談に乗ってくれる（間柄別，頼る度合い） 子育てについての愚痴を聞いてくれる（間柄別，頼る度合い） 育児の大変さをわかってくれる（間柄別，頼る度合い）	
1990年名古屋2地点調査(松本編 1995)*	RG					会話（間柄，頻度別） 外出（間柄，頻度別）
1993年調布市（野沢 2009）	RG	病気の時など家事や看病を頼める(間柄別)	人手がいるとき気軽に手伝いを頼める（間柄別） 気軽に子供の世話を頼める（間柄別）	助言やアドバイスをしてくれる（間柄別）	心配事悩み事を聞いてくれる（間柄別） 気持ちや考えを理解してくれる（間柄別） 能力や努力を評価してくれる（間柄別）	一緒にとても楽しく過ごせる（間柄別）
1993年朝霞市，山形市調査（野沢 2009）	RG	配偶者が1ヶ月入院したとき手伝い(間柄別)	一週間くらい家を空けるとき郵便物の受け取り（間柄別）	借金や資産の運用について相談（間柄別） 子どもの教育や老後の問題について相談（間柄別）	個人的な悩み事について相談（間柄別）	気軽におしゃべりしたり気晴らしをする（間柄別） 日頃頼りにし，親しくする人(間柄，距離別)
SSM1995	PG					知人の有無（20職種）

調　査	調査方式	道具的			情緒的	
		緊急（大）	日常（小）	助言・情報	相談・共感	付き合い
1995年神戸市調査（大和 2000）	RG	病気の時に身の回りの世話をしてくれる人（間柄別）			悩み，心配事の相談相手（間柄別）	
1995，97年岡山市調査（野辺 1999）	NG	入院した場合の世話 2～3万の借金	留守の世話 些細なサービス	仕事上の相談	心配事の世話 失望時の慰め	交友
1996，97年八王子・町田調査（末盛・石原 1999）	RG	病気で寝込んだときなどに看病や家事を頼める（間柄別）	引っ越しなど，人出がいるときに気軽に手伝いを頼める（間柄別） 急な用事ができたときなどに気軽に子どもの世話を頼める（間柄別）	助言やアドバイスをしてくれる（間柄別）	心配事や悩み事を聞いてくれる（間柄別） 気持ちや考えを理解してくれる（間柄別）	一緒にいてとても楽しく時を過ごせる（間柄別）
1997，98年高梁市調査（野辺 2006）	NG	岡山市調査（野辺 1999）と同様				
1999年子育て調査（松田 2001）	NG，RG		育児に関わっている人4人 父の育児参加（5項目）			
NFRJ1999	RG	経済的援助（間柄別） 借金の援助（間柄別） 家族の事故や病気の援助（間柄別） 本人寝たきり，介護の援助（間柄別）	経済以外の援助（相談も一括）		問題を抱えているときの相談（間柄別）	
1999年現代家族調査（家計経済研究所）	NG，RG	病気で寝込んでいるときの援助（間柄別）	引っ越しの手伝い（間柄別）		心配事や悩み事を聞いてくれる（間柄別） 能力・努力を評価してくれる（間柄別） 日頃親しく頼りにする人（間柄別） 同居以外で最も親しくする人3人	
1999年吹田市調査（菅野 2001）	PG，RG					年賀状のやりとり（間柄別，通数別） 付き合いのある人（9職種，間柄別）
1995年文京区，調布市，福岡市中央区，福岡市西区，新潟市，富士市，松江市調査（森岡編 2000）	NG，RG					同居以外で最も親しい人1人 親しい友人（間柄，距離別）
2000年東京調査（松本編 2004）	RG	家族が入院したとき手伝いを頼める（間柄別）	1週間家を空ける時の郵便物の受け取り（間柄別）	貯蓄等運用についての相談（間柄別） 法律問題の相談（間柄別）	個人的な悩み事の相談（間柄別）	日頃頼りにし，親しくする人（間柄，距離別） 気楽にお喋り（間柄別）
2000年名古屋圏調査（松本 2004）	NG，RG	家族が入院したとき手伝いを頼める（間柄別）	1週間家を空ける時の郵便物の受け取り（間柄別）	貯蓄等運用についての相談（間柄別） 法律問題の相談（間柄別）	個人的な悩み事の相談（間柄別）	日頃頼りにし，親しくする人（間柄，距離別） 気楽にお喋り（間柄別） 最も親しい人2人
2000年東京都8地点調査（森岡編 2002）	NG				色々なことを話し合い意見を交換する人5人	
2001年墨田区調査（原田ほか 2005）	RG					親しい親族・友人（距離別）
2003年福岡，徳島調査（安河内編 2008）	NG，RG		日頃から助けを求める人5人			親しくしている人（間柄，距離別）
JGSS2003	NG，PG			仕事のアドバイスをもらう人4人	重要なことを相談する人4人	政治の話をする人4人 知人の有無（18職種PG）
2004年福岡，徳島，熊本調査（森岡編 2006）	RG					日頃頼りにし，親しくする人（間柄，距離別）
SSM2005	RG				過去1年に相談した人（間柄別）	過去1年に招待した人（間柄別）
NFRJ2009	RG	借金の援助（間柄別） 家族の事故や病気の援助（間柄別） 本人寝たきり，介護の援助（間柄別）			問題を抱えているときの相談（間柄別）	

*：名古屋調査は会話の内容，外出の内容を間柄によって変えている

海外で実施された調査の詳細については，Marsden（1990）を参照されたい。

表1にあるように，サポート項目の種類は，一般的に情緒的（表出的）サポートと道具的サポートに分けられる〔浦（1992）; Lin（2001a)〕。前者は，特定の問題解決または要望達成のための実践的なサポートであり，具体的に言うと，就職のための口利きや事業を興すさいの資金援助などがあげられる。後者は，行為者の情緒安定性の維持に寄与しうる心理面を中心としたサポートであり，愛情や愛着，気晴らしなどがあげられる。

道具的サポートはさらに,「深刻なもの（サポート労力の大きいもの)」と「日常のもの（サポート労力の少ないもの)」,「情報やアドバイス」に分けられる。情緒的なサポートも同様に,「相談および共感」と「交遊」に細分化できる。近年では,台風などの災害時におけるサポートのように,緊急性の高い事態に焦点をあてた分析も見られる〔Hurlbert et al.（2001)〕。

表1を見ると多くの調査がリソースジェネレータ方式を採用し，回答者との間柄別にサポート・ネットワークを特定していることがわかる。また，特定されるサポートの種類は，道具的なもの，情緒的なものともに多い。

いずれにしても重要なのは，これらの項目と研究および分析の目的との整合である。そのためには，文献研究，プリテストを慎重に行い，目的に適った項目および測定方法を選択していく必要がある。

（2）ネットワーク項目の詳細な検討

特定するネットワークの種類が決まれば,次は,そのネットワークについてどのようなことを尋ねるのか詳細に決める必要がある。ネームジェネレータ方式であれば，あげられた数名の人々の性別，年齢，回答者との間柄，知り合ってからの年月，親しさ，職業，学歴，メンバー同士の関係などさまざまな質問が考えられる。また，それぞれの質問についての選択肢も用意しなければならない。

ポジションジェネレータ方式であれば，どのような職業的地位または階層的地位を提示するのか，提示した地位にいる人々と「親しい人」を回答してもらうのか,「知り合いの人」を回答してもらうのかにより，特定されるネットワークは異なる。

リソースジェネレータ方式も同様に,「相談相手」や「親しい人」について，間柄別に尋ねるのか，回答者との空間的距離別に尋ねるのかといった決定が必要となる。これらは，分析と密接に関連する。だからといって不必要なものまで聞いてしまうと質問が冗長になり，回答者に多大な負担を与える。したがって，研究目的に沿ったネットワークの種類およびその詳細の測定は，社会的サポート・ネットワーク調査において非常に重要なのである。

3　質問項目の複雑性

社会的サポート・ネットワーク調査の第三の問題は，その複雑性にある。とくに，ネットワークメンバーの属性や相互関係を特定するネームジェネレータ方式は，長大な質問になりやすく，時には調査票の5ページ以上を用いる。内容を簡略化したポジションジェネレータ方式，リソースジェネレータ方式も研究目的を深く追究しようとすればするほど質問が長く複雑になるというジレンマに陥る。

たとえば，表3の岡山市の調査をリソースジェネレータ方式に変更したとしよう。そのさい，各サポート項目について，親族，友人，近隣の人，職場の人ごとに，さらに，回答者との空間的距離別に尋ねるとすれば，質問量はかなり多くなる。ポジションジェネレータ方式についても，たとえば，50の職業について男女別，親しさ別に知人の有無を尋ねれば，その量は決して少なくない。前項でも触れたように,「とりあえずあったほうが良いから」という理由で，いたずらに多くの項目を盛り込んでしまうと，回答の手間と複雑性は極めて増大する。

この分量の多さと複雑性は，結果として，無回答および誤答を招きやすくする〔星･石田(2002)〕。複雑で労力の多い質問は，いきおい回答ミスや回

答への忌避を生みやすい。また，調査そのものへの協力の姿勢も失わせてしまうかもしれない。このような問題を回避するためにも，調査票の吟味は慎重に行わなければならない。

4　ネットワーク認知の問題

第四，第五の問題はおもに分析に関連する。第四の問題はネットワーク認知である。行為者同士のネットワークの認知にズレが生じることは，Krackhardt（1987）や大西（2003）が明らかにしている。行為者が「誰にも頼れない」と感じていても，サポートの相手はたくさんいたり，「頼れるはず」と感じていても，実際にはあてにならないという状況は珍しいことではない。回答者からの一方的な情報に依存する社会的サポート・ネットワーク調査は，必ずしも実態を反映したものではない可能性があることに留意すべきである。

ネットワーク認知の問題は，ネームジェネレータ方式において格段の注意が必要である。というのも，ネームジェネレータ方式は，回答者が提示する他者の情報に依拠するからだ。実際のところ，人々は自らの属性や経歴ほど他人の情報を知らないことが多い。とくに，ネットワークメンバー同士が知り合いか否かということは，同じグループに属する人々をメンバーとしてあげたケース以外はそれほど正確ではないだろう。ネットワーク認知の問題は，行為者が自らのネットワークを特定する社会的サポート・ネットワーク調査の特性上避けられない問題である。

この問題を防ぐ根本的な手だては，回答者とネットワークメンバーとのダブルチェック以外はない。しかしながら，そのように手間をかけられる調査はそれほど多くないし，仮に両者の回答に齟齬が見られたとしても，最終的にどちらが正しいか判断し得ないケースもある。たとえば，回答者とメンバーとの親しさの認知について両者の間に齟齬があったとしても，どちらが正しいかは判断し得ない。

結局，ネットワーク認知の問題の予防法として考えられるのは，データクリーニングを慎重に行い，極力，怪しいデータを取り除くことである。たとえば，「回答者の両親」としてあげた人物が回答者よりも年齢が低いといったケースはあまり信用すべきではない[11)]。

5　マイナスの関係の扱い

社会的サポート・ネットワーク調査の最後の問題は，マイナスの関係への視点の薄さである。社会的サポート・ネットワーク調査は，「重要なことを相談する人」「親しい人」といった形で，行為者にとってプラスの影響をもたらすネットワークを特定する。そのため，当然ながら，ネットワークの中にあがってくるのは，回答者が「サポート源」として認識した人のみとなる。社会的サポート・ネットワーク研究は，この手法を用いることで，固有の間柄や属性，物理的境界に限定されずに人びとの人間関係を特定し，構造的視点から把握された人間関係の影響を分析することを可能にした。

こうした研究方法は，既存の規範が揺らぎ，関係の選択性が高まった状況では，非常に有効である。というのも，制度や規範により定められた境界と関わりなく，多様な場に属する人びとの影響を考慮することができるからだ。しかしながら，制度や規範が根強く残っている場では，社会的サポート・ネットワーク調査だけでは不十分な場合も多い。というのも，制度・規範により関係形成の基盤が確保され，諸個人の意思に拘わらず関係が継続する人びとの影響を軽視してしまうかもしれないからだ。これについて，もう少し詳しく解説しよう。図1を見て欲しい。

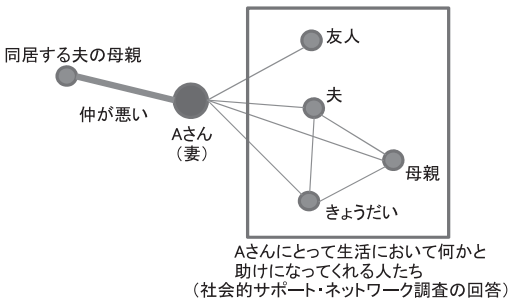

図1　社会的サポート・ネットワーク調査で特定されるネットワーク

図1の右側には，行為者A（女性）が「生活において何かと助けになってくれる人」として回答した社会的サポート・ネットワーク調査（ネームジェネレータ方式）の結果が示されている。社会的サポート・ネットワーク研究では，こうした関係はどのような人びとによって構成されているか，また，こうした関係は人びとの行為や意識にどのような影響を与えるか検討する。しかし，ここで注意したいのは，行為者Aの関係は社会的サポート・ネットワーク調査であがってきた人のみでは完結しない，ということだ。

たとえば，ある人との付き合いが制度や規範により半ば義務づけられているとすれば，その人との関係は，その善し悪しに拘わらず継続を強いられる。仮にその人との関係が悪い場合には，当然ながら，ポジティブなサポート関係の特定を目的とした社会的サポート・ネットワーク調査において，その人の存在は明らかにならない。しかしながら，関係が悪いけれども付き合っていかなければならない人びとは，社会的サポート・ネットワークのメンバー以上に行為者に強い影響を与えている可能性もある。図1の左側はそのような関係を表している。

親族規範が弱まったとはいえ，夫の両親と同居していれば，その両親との付き合いを避けるのは難しい。図のように，関係が悪化しているにも拘わらず同居している夫の母親がいれば，その人は妻である女性（Aさん）の生活に多大な影響を及ぼすかもしれない。しかしながら，社会的サポート・ネットワーク調査では，そうした人びとの影響を捕捉しえない。そのように考えると，ある程度強固な制度や規範により，関係の継続を半ば義務づけられた人が存在する場合には，関係の内容を別途特定しておく必要があると言えよう。

V　おわりに

ここまで社会的サポート・ネットワーク研究の歴史的経緯を振り返り，その測定方法および測定のさいの注意点・問題点を議論してきた。行為者の人間関係を把握するという試みの性質上，注意点は多数あるものの，社会的サポート・ネットワーク調査は，その欠点を補って余りある魅力を備えている。

個人化が進む現在社会において，血縁，地縁，社縁といった中間集団は弱まりつつあり，自己選択的に取り結ばれる「純粋な関係」（pure relationship）の影響が強まっている〔Giddens（1991=2005）〕。社会的サポート・ネットワーク研究は，その変化にいち早く着目し，拡大しつつある人間関係の影響や様相を解明してきた。今後，個人化が進んでいけばその要請は一層強まるだろう。そうした要請に応えるべく実証研究を積み重ね，科学的研究として豊穣な成果を残してゆくことを望みたい。

注

1）かりに「ネットワーク研究」とした場合には，人間関係だけでなく，インターネットの諸サイト間の関係や人体の各器官の結びつきなどさまざまな領域が射程となる。パーソナル・ネットワーク研究は，その中でも人間関係に特化している。

2）行為者個人の人間関係を把握するアプローチはエゴセントリック・ネットワーク・アプローチとも言える。その歴史的経緯については，Wellman（1993）を参照されたい。

3）たとえば，Wellman and Wellman（1992）や野沢（2009）を参照されたい。

4）ただし，都市社会学ではパーソナル・ネットワーク研究と言われている。都市社会学が社会的サポート・ネットワーク・アプローチを取り入れた経緯の詳細については，森岡（1979）を参照されたい。

5）アフリカの初期の代表的研究がMitchell eds.（1969=1983），北米の初期の代表的研究がWellman（1979=2006），Fischer（1982=2002）である。

6）諸個人のストレスの軽減や心理的安寧とネットワークとの関連に着目した研究のみを「ソーシャル・サポート研究」ということもある。諸個人のストレスの軽減や心理的安寧を射程とした研究の詳細は，House et al.（1988），浦（1992），松井・浦編（1998）を，地位達成に着目した研究はLin（1999），石田・小林（2011）を，政治的態度については飽戸編（2000），安野（2006）を，外国人認知については伊藤（2000），田辺（2002）を参照されたい。

7）1985年のGSS調査の詳細は，Burt（1984）を参照されたい。

8）ネームジェネレータ方式における制約の問題については，Campbell and Lee（1991）を参照されたい。

9）ポジションジェネレータ方式のその他の問題として菅野は,「(1)測定している職種の代表性,(2)友人と親戚など関係の区別，(3）交際相手の職業についての情報のみをとらえている点，(4）無職女性や専業主婦の交際の描写という点」〔菅野（2001）, p. 54〕を挙げている。これらの欠点も踏まえて，測定方法を選択する必要がある。

10）Bernard et al.（1990）は，ネームジェネレータ方式によって特定した複数のネットワークの特性を比較した。その結果，社会的サポート・ネットワークを特定する質問文により，行為者のネットワークサイズおよびネットワークの構成が異なることを明らかにした。また, GSS調査のネットワーク項目の妥当性について調べたRuan（1998）は，「あなたにとって重要なことを相談する人」（discuss important matters to you）は借金や病気の世話などであげられるネットワークと異なることを指摘した。

11）ただし，義理の両親をあげた場合に，回答者よりも両親の年齢が低いといったケースも理論上は起こりうる。しかしながら，現在の日本社会においてそのようなケースは稀であろう。

文献

飽戸弘編著（2000）『ソーシャル・ネットワークと投票行動』木鐸社。

Bernard, H. Russell, Eugene C. Johnsen, Peter D. Killworth, Christopher Mccarty, Gene A. Shelley, and Scott Robinson, 1990, “Comparing Four Different Methods for Measuring Personal Social Networks” *Social Networks* Vol.12: 179-215.

Bott, Elizabeth.（1955）“Urban Families: Conjugal Roles and Social Networks”, *Human Relations* Vol.8: 345-384.（=2006,野沢慎司訳「ノルウェーの島内教区における階級と委員会」野沢慎司編･監訳,『リーディングスネットワーク論――家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 35-91。）

Bott, Elizabeth.（1957）*Family and Social Network: Roles, Norms, and External Relationships in Ordinary Urban Families,* New York: Free Press.

Burt, Ronald.（1984）“Network Items and the General Social Survey”, *Social Networks* Vol.6 Part4: 293-339.

Campbell, Karen E., and Barrett A. Lee.（1991）“Name generators in a Surveys of Personal Networks”, *Social Networks* Vol.13 Part3: 203-221.

Fischer, Claude S.（1982）*To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City,* Chicago: The University of Chicago Press.（=2002,松本康・前田尚子訳『友人のあいだで暮らす――北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社。）

藤崎宏子（1998）『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館。

Giddens, Anthony.（1991）*Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Modern Age,* Cambridge: Polity Press.（=2005,秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』ハーベスト社。）

原田謙・杉澤秀博・浅川達人・斎藤民（2005）「大都市における後期高齢者の社会的ネットワークと精神的健康」『社会学評論』Vol.55 No.4: 434-447。

星敦士・石田光規（2002）「ネットワーク質問項目に対する無回答とその要因」森岡清志『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会, 225-244。

House, J. S., D. Umberson, and K R. Landis.（1988）“Structures and Processes of Social Support” *Annual Review of Sociology* Vol.14: 293-318.

Hurlbert, Janne S., John J. Beggs, and Valerie A. Haines.（2001）“Social Networks and Social Capital in Extreme Environments” in Lin, Nan, Karen Cook, and Ronald Burt eds., *Social Capital: Theory and Research,* New York: Aldine de Gruyter, 209-231.

石田光規・小林盾（2011）「就職におけるネットワークの役割――戦略的資源かサポート資源か」石田浩・近藤博之・中尾啓子『現代の階層社会2――階層と移動の構造』東京大学出版会,239-252。

伊藤泰郎（2000）「社会意識とパーソナルネットワーク」森岡清志『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会, 141-159。

Kawachi, Ichiro, S. V. Subramanian, and Daniel Kim eds.,（2008）*Social Capital and Health:* Springer Science + Business Media.（=2008,藤澤由和・高尾総司･濱野強監訳『ソーシャル･キャピタルと健康』日本評論社。）

Krackhardt, David.（1987）“Cognitive Social Structures” *Social Networks* Vol.9 Part2: 109-134.

Lin, Nan.（1999）“Social Networks and Status Attainment” *Annual Review of Sociology* Vol.25: 467-487.

Lin, Nan.（2001a）*Social Capital: A Theory of Social Structure and Action, Cambridge:* Cambridge University Press.（=2008,筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子訳『ソーシャル・キャピタル――社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房。）

Lin, Nan.（2001b）“Building a Network Theory of Social Capital” in Lin, Nan, Karen Cook, and Ronald Burt eds., *Social Capital: Theory and Research,* New York: Aldine de Gruyter, 3-29.

Lin, Nan, Yang-chih Fu, and Ray-May Hsung.（2001）“The Position Generator: Measurement Techniques

for Investigations Social Capital" in Lin, Nan, Karen Cook, and Ronald Burt eds., *Social Capital: Theory and Research,* New York: Aldine de Gruyter, 57-81.

Litwak, Eugene, and Ivan Szelenyi, 1969, "Primary Group Structures and Their Functions: Kin, Neighbors, and Friends" *American Sociological Review* Vol.34 Part4: 465-481.

Marsden, Peter V.（1990）"Network Data and Measurement" *Annual Review of Sociology* Vol. 16: 435-463.

松田茂樹（2001）「育児ネットワークの構造と母親のWell-Being」『社会学評論』Vol.52 No.1: 33-49。

松井豊・浦光博編（1998）『人を支える心の科学』誠信書房。

松本康編（1995）『増殖するネットワーク』勁草書房。

松本康編著（2004）『東京で暮らす――都市社会構造と社会意識』東京都立大学出版会。

松本康（2004）『大都市における社会–空間構造と社会的ネットワークに関する研究』平成12 ～ 15年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書。

Mitchell, Clyde eds.（1969）*Social Networks in Urban Situations: Analysis of Personal Relationships in Central African Towns,* Manchester: Manchester University Press.（=1983,三雲正博・福島清紀・進本真文訳『社会的ネットワーク――アフリカにおける都市の人類学』国文社。）

森岡清志,1979,「社会的ネットワーク論――関係性の構造化と対自化」『社会学評論』30（1）: 19-35.

森岡清志編（2000）『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会。

――――――（2002）『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会。

――――――（2006）『既婚女性の就業とパーソナルネットワークに関する研究』平成15 ～ 17年度科学研究費補助金　基盤研究（B）　研究課題番号15330102　研究成果報告書。

野沢慎司（2009）『ネットワーク論に何ができるか――「家族・コミュニティ問題」を解く』勁草書房。

野辺政雄（1999）「高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて」『社会学評論』Vol. 50 No.3: 375-392。

野辺政雄（2006）『高齢女性のパーソナル・ネットワーク』御茶ノ水書房。

大西康雄（2003）「ネットワーク認知の「正確さ」とは何か――政治家ネットワークにおけるCSとLASの分析的有効性の比較研究」『理論と方法』Vol.18 No.1: 53-70。

大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編（2005）『日本版Gneneral Social Surveys基礎集計表・コードブック　JGSS-2003』大阪商業大学比較地域研究所。

大谷信介（1995）『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク――北米都市理論の日本的解読』ミネルヴァ書房。

Ruan, Danching.（1998）"The content of the General Social Survey discussion networks: an exploration of General Social Survey discussion name generator in a Chinese context" *Social Networks* Vol.20 Part3: 247-264.

関井友子・斧出節子・松田智子・山根真理（1991）「働く母親の性別役割分業観と育児援助ネットワーク」『家族社会学研究』Vol.3: 72-84。

末盛慶・石原邦雄（1999）「有配偶女性の家族関係とネットワーク――「思春期の子育てと家族生活に関する調査から」『総合都市研究』Vol.70: 137-153。

菅野剛（2001）「交際の指標の妥当性について」川端亮・田中重人『吹田市民のコミュニティ・ネットワークに関する調査報告書』大阪大学大学院人間科学研究科社会環境学講座先進経験社会学研究分野, 52-67。

田辺俊介（2002）「外国人への排他性とパーソナルネットワーク」森岡清志『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会,101-120。

浦光博（1992）『支えあう人と人――ソーシャル・サポートの社会心理学』サイエンス社。

Wellman, Barry.（1979）"The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers" *American Journal of Sociology* Vol.84 Part5: 1201-1231.（=2006, 野沢慎司・立山徳子訳「コミュニティ問題――イーストヨーク住民の親密なネットワーク」野沢慎司編・監訳,『リーディングスネットワーク論――家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 159-200。）

Wellman, Barry.（1993）"An Egocentric Network Tale: Comment on Bien et al.（1991）" *Social Networks* Vol.15 Part4: 423-436.

Wellman, Barry and Scot Wortley.（1990）"Different Strokes from Different Folks: Community Ties and Social Support" *American Journal of Sociology* Vol.96 Part3: 558-588.

Wellman, Barry, and B. Wellman.（1992）"Domestic Affairs and Network Relations" *Journal of Social and Personal Relationship* Vol.9.

大和礼子（2000）「"社会階層と社会的ネットワーク"再考――〈交際ネットワーク〉と〈ケアネットワーク〉の比較から」『社会学評論』Vol.51 No.2: 235-250。

安河内恵子編（2008）『既婚女性の就業とネットワーク』ミネルヴァ書房。

安野智子（2006）『重層的な世論形成過程――メディア・ネットワーク・公共性』東京大学出版会。

1995年SSM調査研究会（1996）『1995年SSM調査コー

ド・ブック』1995年SSM調査研究会。

（いしだ・みつのり　大妻女子大学准教授）